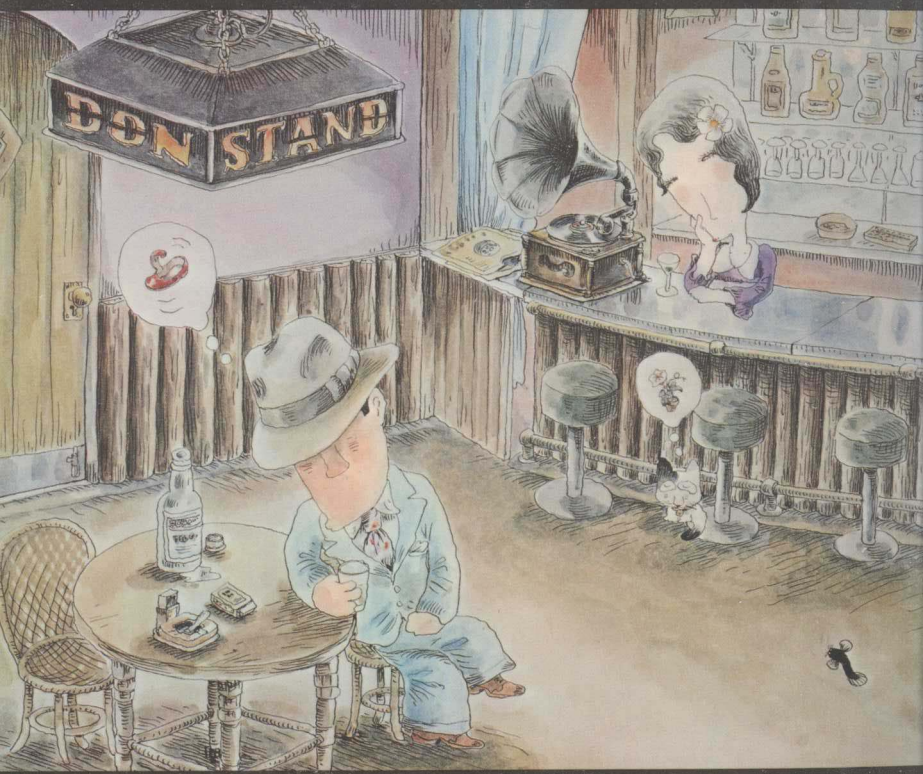


あゝ東京行進曲

結城亮一



あゝ東京行進曲

結城亮一



河出書房新社

あゝ東京行進曲

昭和五十一年七月三十日 初版発行
昭和五十二年一月三十一日 再版発行

著 者 結 城 亮 一

装幀者 滝 田 ゆ う 田 沢 司

発行者 佐 藤 皓 三

発行所 株式会社 河出書房新社・東京都新宿区住吉町九五

電話東京 三五五―五三一・振替東京 〇―一〇八〇二

印刷所 暁 印 刷 株 式 会 社

製本所 中西製本印刷株式会社

©1976

定価はカバー・帯にあります

あゝ 東京行進曲

出 発

黒っぽい地面がむき出しになったプラットホーム。まん中に小さな駅舎がぼつんとある。あとは、はずれのほうに小屋のようなものが一つあるきりで、ホームは吹きさらしのままである。そこを線路が一車線だけ走っていた。

その反対側、つまり、線路を越えた向こう側には広大な田畑がひろがり、ひと冬の雪の重みに疲弊しきったような、色あせた姿をさらけ出している。

そしてそのはるか遠くには、ふだんならかすんで見えない白い山々が、晴れあがった西の彼方に雪をかぶってくっきりと見える。そこにはまだ、冬が厳然と居すわっていた。風は、その山々からそよいでくるのだろうか。しかし、もはや酷寒のきびしさはなく、春の気配を感じさせる柔らかさを含んでいる。

気をつけて見ると、冬に疲れた筈の野面のづらのそここに雑草が芽を出し始めているし、線路や駅舎の軒下などにも名の知れぬ小さな草の芽が吹き出ている。

ホームの中ほどに駅名を表示した白い立て札があり、黒い大きな字で「てんどう」と書かれてある。新芽は、その立て札の二本の足のところでも、小刻みに身をふるわせていた。

ホームのあちこちに汽車を待つ人々がいる。唐草模様の大きな風呂敷包みを地面に置き、しゃがんだままキセルを吸っている老人。角帯をしめ、烏打帽をかぶった若い男。信玄袋一つだけをさげた中年婦

人とインパネスの男などであるが、その中にちょっと変った一組があった。

袖と裾の長い真っ白なドレスを着た西洋婦人をはさんで、エビ茶の袴に矢絣りの着物を着た少女と、赤ん坊をおぶった女だ。

何のことはない、変っているというのは西洋の女がいるというだけのことだが、ホームの人々は物珍しそうにそのほうへ視線を向けていた。

鳥打帽の男が老人のそばへやってきてタバコの火を借りながら、

「あそこさいる毛唐のオナゴは何だべなっす……」

「ん、あれは、天童教会のオナゴ牧師みたいなもんだべ」

「なんだ、ヤソ教か。そんじゃ、そのそばサ居るのは？」

「あれはお前、河田屋のめかけとその娘だ。あの娘が東京の学校に入るつうんで出かけるとこだべ。あの毛唐から連れてってもらうらしい」

「へえ、あれが河田屋のめかけの子ね、仲々たいした器量でねえか」

「だけんどよ、まんだ十三やそこらだぞ」

「あれで十三か、もう丸きり女でねえか」

なるほど、少女の背丈は西洋婦人とほんの二、三センチしか違わない。リボンをつけた長い黒い髪を高く結びあげている。

年齢は正確には十四歳だった。その少女の母親、つまり赤ん坊を背につけた女が西洋婦人に話しかけた。

「東京は何かとぶっそうな所だと聞いておりますけれど、こんな在郷から急に出してやって大丈夫だべ

かねえ」

それまで幾度となく投げかけた質問を、心配のあまりまたぞろ出してみるのだった。

「おマツさん、ダイジョウブ。東京のスクールは規則がきびしいからネ」

「そんだったら安心だげんと、とにかくこの子はお転婆だからねえ、今まであれだけ他人様サ迷惑かけたんだから」

「むこうのティーチャーは、みんなきびしい人ばかりだからダイジョウブ」

すると線路のほうを向いていた少女がくるとふり返って、

「あら厭だミス・キルバン。あたしの入る女学校はやさしい先生ばかりだっておっしゃってたくせに……」

と口をとがらせた。卵型の顔と大きな目、頬のあたりに赤味をおびているのは、それだけ色が白いからだろう。

少女の抗弁に対してミス・キルバンは、

「規則を守ればみんなやさしいティーチャーばかりだけど、言うことをきかない子にはきびしくします。お千代さんは素直にティーチャーの言うことをきいて、正しい学校生活を送るでしょうから、きつとやさしくしてもらえますよ」

「わかったかい、千代」

母親にたたみこまれて千代という少女は、「はい」「が」「はい」ときこえるような厭々ながらの返事をした。

「今年は雪どけが遅いようですネ」

キルバンは遠方に横たわる白い山々を見て言った。

「ミス・キルバン。あの山は万年雪の山なんです。五月頃まであのままで、真夏になっても斑模様になって残るんです」

マツが教えた。

「オオそうですか、知りませんでした。夏でも雪が見られるなんて、スバラシイ山です。山のナマエ教えて下さい」

「月山といいます」

千代が教えた。

「ガッサン？」

キルバンはそれがどういう意味なのかわからないようすなので、月の山という意味であることを説明するとやっとうなずき、美しい名前ですね、とほめるのだった。

駅舎から人が出てきた。肩章をつけ、剣を帯びている。駅長だ。まもなく汽車が入ってくるらしい。遠くから汽笛がきこえてきた。

「来た来た」

千代が言いながらホームから身をのりだすと、駅長が見つけて、大声でどなった。千代はあどすざりをし、トランクとバスケットを両手にさげた。

汽車がすべりこんできた。長い煙突、313という機関車番号。三輦の客車と一輦の貨車を牽いている。だんだんゆるやかになっていって、最後に下のほうから二、三度はげしく蒸気を吹き出して停車した。

千代とキルバンが乗りこみ、座席の窓をあけた。そこへマツが歩み寄った。

「ええか千代、立派な通弁士になってくるんだよ」

「通弁士になるか何になるか、行ってみなければわがらないよ、母ちゃん」

十三の少女にしては大人っぽい言葉である。

「また、そだなこと言う。父ちゃんとはつきり約束したでねえの」

言われて千代は父のことばを思いうかべた。

——これからの日本は外国との貿易も盛んになるべから、通弁士になるというのなら東京サ行ぐのもかまわねえが、そんでなければ絶対だめだぞ。

「わかったよ母ちゃん。約束どおり通弁士になるよ」

汽笛が鳴った。

「ミス・キルバン、それじゃ千代をよろしくおねがいます」

キルバンは頷き、

「またしばらく教会のほうを留守にしますが、牧師先生に協力して下さい」

「はいはい、ご安心ください」

汽車が、煙をひとときわ激しく吹き出して動きはじめた。

「行つてきまーす」

「からだサ氣いつけろよ」

汽車が少しずつ早くなった。マツが手を振りながら小走りになった。背中 of 赤ん坊が揺れた。煙が空高く舞い上った。そして、遠くの月山を覆うように広がっていった。

マツはホームのはずれまで行き、遠ざかってゆく汽車を見送った。そばに石炭小屋があり、炭塵で汚れた黒い雪のひとかたまりが、陽のあたらないその北側のすそにこびりつくように残っていた。明治四十四年三月のことである。

神のめでし子

天童の街中を、羽州街道が南北に貫いていた。その街道上に南から始まって一日町、五日町、三日町、田町と街なみが続き、それがいわば天童の中心街であった。

道の両側には旅人宿や塗物屋、将棋駒屋、ロウソク屋、下駄屋、車屋、豆腐屋、指物屋、白酒屋などが並んでいたが、中でも五日町の生糸問屋である河田屋は、その構えの立派さでひととき目立った。

天童には、遠く関西からやってくる商人が多く出入りした。かれらは、京都大阪から古着類をかついできて売り歩き、帰りにはこのあたりの特産物である紅花、青苧、生糸、ロウなどを買い集めて帰ってゆくのである。

河田屋は、昔からそれらの近江商人へ紅花や生糸などを売る問屋であり、かたわら金融業や米穀の取り引きも行うという多角経営ぶりで、天童屈指の商家であった。(ただし紅花だけは明治二十年頃からすたれてしまっていた。)

主人の名を佐藤英三郎といい、女房をすずといった。だが不幸なことにこの夫婦には子供がなかった。そしてすずは病弱で、寝てばかりいた。それからあらぬか、英三郎は手伝いのマツに子供を生ませた

のである。

マツは茶の湯生け花など、作法礼法を習う目的で河田屋に出入りしたのだったが、炊事洗濯などの家事いつさいから、奥方の病床の世話までみずからすすんでやろうとするので河田屋では、好ましく見ていたのは事実だった。英三郎も妻との間に子宝の恵まれない不幸に対して、先ゆきの不安を感じていたし、妻のすずも、子供の生めぬ病弱な自分を考え、このまま離縁されるよりは英三郎が他の女の腹を借りて子孫をもうけ、それを養子にしてくれたほうが、河田屋の繁営のためにもそして自分のためにも悪いことではないと、割りきって考えるようになっていたのだった。

そこに生まれてきたのが千代である。

以後マツは住まいを別に持たせられ、正妻に劣らぬ待遇をうけるようになった。

マツは、昔から天童教会の信徒でもあった。親の実家がヤソ教だったから、小さい頃から教会に出入りしていたのだが、河田屋で仕事に追われるようになってから行く機会が少なくなっていたのを、子供ができて別宅で暮らすようになってからまた行くようになった。マツは赤ん坊の千代を抱いて毎日教会へかよったのである。

天童教会は三日町にあった。そこは山形県で最初に出来たメソジスト教会であった。

徳川家康の禁じたキリスト教が解禁になったのは明治六年であるが、その年、アメリカ北エビスコパル・メソジスト外国伝道会社では、マクレー、デビソン、ソーバーの三人を日本に派遣し、マクレーは横浜、デビソンは長崎、ソーバーは東京を受けもって布教を始めたのである。

東京担当のソーバーは、明治八年に津田梅子の両親を洗礼しているが、そのかが明治十一年に天童にやってきて布教したのが、そもそもの天童教会の出来る発端であった。

千代が生まれたときの天童教会の牧師は杉原正義という人で、東京の本郷にあるメソジストの本拠「中央会堂」から派遣されてきた人であった。

慈悲心の篤い人で、マツの腕から千代を受けとると、まるであやすようにルカ伝の一節を口にするのだった。

「おさな子よ、なんじは、いとたかきものの予言者となえられん」

千代は生まれながらにしてキリスト教の環境下におかれたのである。そして、長じて小学校に入るようになると、母のマツよりも熱心に教会へ出入りした。それは、当初は一応不運な生まれかたであった自分に救いを見出す場所が教会であることを、本能として知っているかのようにであった。

千代はしかし、周囲からいじめられる弱い子に育っていったというわけではない。むしろそれは逆で、からだも大きく、気の強い性格となり、小学校に入ると男まさりのお転婆ぶりを発揮していき、学校でも評判となっていたのだ。

「めかけの子！」

あるとき、ふとしたことで後藤ウメという同級生からのしられた。河田屋の正妻すが生死のあいだをさまよっているとき、まもなく正妻にとって代るであろうマツに対して、やかみの気持から汚ないことばを使う者もいて、それは子供たちにまで伝わるようになったのだ。千代はその子のおさげ髪を両手でつかんで、うしろへ思いきり引いた。

後藤ウメはのけぞるように倒れ、そのとき机の角に顔をぶつけた。悲鳴をあげながらウメは顔を両手で覆った。その指のあいだから鼻血がポタポタとたれた。

その子の親が河田屋にどなりこんでくると、英三郎は多額の治療費を包んで詫びた。

こうしたことが一度や二度ではなかったが、そのたびに英三郎は黙って相手に頭をさげるだけで、千代を少しも叱らなかつた。

気の強い筈の千代も、教会に来るとおとなしくなつた。そして自分がときどきののしられることを牧師に訴えたのである。すると牧師は、千代の頭をやさしくなでながら、ヨハネ伝福音書の話をしてくれるのだった。

「人間はみんな、キリスト・イエスにあつて一体なのです。人間はどんな生まれかたをしても、みんな神のめでし子なのです。神の愛する子なんです」

——神のめでし子、神の愛する子。

千代はこうしたことばに心のやすらぎを覚えた。牧師先生の話をしき、讃美歌をうたうと不思議と心がなごんで別人のようになった。

教会にはときどき、仙台や東京から、若くて美しいアメリカの婦人伝道師がやってきて讃美歌指導をした。

だが、讃美歌というものは、外国特有の長音階であるため、日本人には仲々なじめなかつた。そのなじめない筈の讃美歌を、千代は上手に歌いこなした。

「千代さん、あなたには歌の才能がありますね」

婦人伝道師のミス・キルバンが言つた。

「あなた、声楽のほうへ進んだら、きっと成功しますよ」

千代には、西洋のメロディーに自然にのつていく才能が確かに見られたのである。

クリスマス・イブの夜、千代は初めてみんなの前で独唱した。

うるわしの白百合

ささやきぬむかしを

イエスキミの墓より

いでましむかしを

千代の幼いソプラノは、小さい堂内にとどろき、戸のすきまから、雪の降る夜の戸外へ流れていった。

教会では英語も教えた。千代はそのほうもよく出来たので、母のマツは千代を音楽の道へ進ませるか、通弁士の道へ進ませるかのとちらかにしたいと考えた。

英三郎に相談するとかれはこう言った。

「英語が好きなら通弁士になるのもええべと思うが、音楽なんて河原乞食のすることだから反対だ」

子供のことは、いっさいマツに任せて何も言わなかった英三郎だったが、音楽家になることだけは反対したのである。

千代自身は、どちらかといえば音楽をやりたいかったのだが、このときは父のことばに従い、通弁士になるという約束で東京の学校に入れてもらうことにしたのだった。

普連土女学校

教会がすすめてくれた学校は、東京の三田にある普連土女学校である。それはアメリカ・フィラデル

フィアの友会派婦人伝道師たちによって作られたものだが、設立時には津田梅子の父の津田仙も敷地を提供したりして協力した学校だった。

津田は日本で最初の農学校「学農社」を作った人であり、そのかみを洗礼したのが天童へ布教に来たソーパーだったから、天童教会と関係が深かったわけである。「普連土」という校名も津田がつけたものである。

列車が上野へ着いたのは、出発した翌日の昼頃だった。その日は浅草教会で旅の疲れをとり、翌日、その牧師である塩川千代次とキルバンと二人に伴われて学校へ連れてゆかれた。

三田の功運町には木造瓦屋根のきれいな普連土女学校が建っていた。門のところで千代は足をとめ、校舎をふりあおいだ。トンガリ屋根に大きな十字架がくっついていて、これから五年間、いったいどんな学生生活が待ちうけていることだろうと、千代は胸をふくらませた。

東京の女学生は、緋か縞の着物に袴をはき、髪を束髪にしてそこに白か紫のリボンをつけていた。千代も同じスタイルで浅草から三田までチンチン電車に乗って通学することになった。浅草教会の塩川牧師が千代の保証人となり、そこに身をよせたからである。

千代のクラスは二十一人で、千代をのぞいては全部、東京か或いはその近辺の者ばかりだった。そのため、千代の山形なまりはクラスで目立ったが、英語の読み書きがぬきん出ていたのでバカにされることもなく、千代はもちまえの社交性を発揮してみんなの中にとけ込んでいった。

千代の英語は確かに抜群だった。特に会話がうまく、ミス・ルイスという英語教師からほめられ、級友から羨望の目で見られた。

だが千代は、本当は英語などより歌を勉強したいのだとみんなに言った。

「まあ、歌ですって！」

級友たちはおどろいて千代を注目した。

千代は、天童教会で歌の上手なことをほめられた話をした。

「すてきだわ、それじゃ何か歌ってよ」

「ね、歌って、歌って」

みんな千代の回りに集まってきてせがむので、千代はてれもせずに讃美歌の一節を短くうたった。

いずみのほとりに咲きいでたる

つゆけきさゆりのゆかしきかな

きいていた級友たちは、千代がまさしく美声の持主であることを知っていつそう驚いたり羨しがったりした。

入学してまもなく、千代は、この学校についての妙な点に気づいた。それは、クラブ活動の中に音楽に関するものが一つも見あたらないということであった。

それはきっと、愛好者が少ないからか、或いはリーダーシップをとる者がいないためであろうと思いい、そういうクラブを自分が率先して作ろうと千代は思いついた。

クラスでその話をする、同志が数人集まってきたので結成の準備にとりかかった。

ところが、何とその動きに対して学校側から待ったがかけられたのだ。

「音楽は享樂的なものです。そういう集まりは認められません」

千代はふんがいった。

「おかしいですわ先生、この学校でも礼拝のとき讃美歌をうたうじゃありませんか」